

# 広島市「平和宣言」の文章と文体

## —文字数と語に焦点をあてて—

小川 俊輔<sup>\*1</sup>・藤井 緑<sup>\*2</sup>

### 1. はじめに

1947（昭和22）年より、年に1度、広島から世界に向けて発信される宣言がある。毎年8月6日に開催される平和記念式典（広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式）において広島市長が読み上げる平和宣言である。

最初の平和宣言はGHQ統治下の1947（昭和22）年に開催された第1回平和祭で読み上げられた。「平和祭で広島市長が読み上げる平和宣言」という形式で3年続いたが、1950（昭和25）年の第4回平和祭は朝鮮戦争勃発の為に中止となり、この年、平和宣言は発表されなかった。翌1951（昭和26）年も平和宣言は発表されず、その代わりに「市長あいさつ」が公にされた。しかし、広島市の公式ホームページ内にある、過去の平和宣言の一覧を掲げるページには、この「市長あいさつ」も掲げられている。

#### 1. 1 研究の目的

本論文は、1947（昭和22）年から2015（平成27）年までに発表された68の平和宣言（1951（昭和26）年に発表された「市長あいさつ」も含む）について、日本語学の立場から、特に文章論・文体論の観点から考察することを目的とする。

#### 1. 2 研究の方法と本論文の構成

過去の平和宣言はすべて広島市の公式ホームページに“コピー & ペースト”ができる状態で公開されている。そこで、まず、68の宣言文を1つの電子ファイルにまとめ、「広島・平和宣言コーパス」を作成した。このコーパスを用いて、章ごとに異なる方法で分析・考察を行う。まず、第3章では文字数の変遷について明らかにする。第4章では語に焦点を当てた分析を行う。具体的には、頻出語彙の出現度数による分析、歴代市長に特徴的な語彙の明示化、構成要素対応表による分析、対応分析による分析である。なお、第2章では基礎的な情報として、平和記念式典の歴史、宣言文の創作プロセス、平和宣言を読み上げてきた市長について、簡単に紹介する。第5章は論文全体のまとめである。

#### 1. 3 先行研究

広島市「平和宣言」に関する先行研究として、①宇吹暁（1992）『平和式典の歩み』、②角家文雄（1996）「ヒロシマ「平和宣言」の50年」、③新宅匠（2012）「「平和」の語りの変遷—広島平和宣言を中心に—」、④松浦陽子ほか（2013）「広島の平和観：平和宣言を通して」などがある。①は濱井市長、渡辺市長、山田市長、荒木市長時代（1947（昭和22）年→1990（平成2）年）の平和宣言および平和記念式典について、多くの一次資料にあたって書かれた労作である。②は被爆50年の節目に書かれた論文で、①の扱う4市長および平岡市長時代（1947（昭和22）年→1998（平成10）年）の平和宣言について考察

\*1 県立広島大学人間文化学部国際文化学科・准教授

\*2 県立広島大学人間文化学部国際文化学科・卒業生

したもの。③は「平和」の意味に焦点を絞った論文で、特に、平岡市長と秋葉市長時代（1991（平成3）年→2010（平成22）年）の宣言について、詳しい分析を行っている。④は、最新の松井市長時代の平和宣言も対象に加え、過去の平和宣言の頻出順位上位54語に基づいて、平和宣言の「平和観」について考察したものである。①～③は松井市長時代（2011（平成23）年→2015（平成27）年）の平和宣言については考察が及んでおらず、また、①～④のいずれも宣言の内容に焦点をあてた政治学、歴史学あるいは平和学の手法による研究であり、言語学の手法による分析は行われていない。

## 2. 平和宣言にかんする基礎的情報

### 2. 1 平和祭と平和宣言

平和宣言は平和祭とともに始まった。最初の平和祭は、被爆から8カ月経った1946（昭和21）年4月、広島市長会連盟により、原爆1周年の記念として「平和復興祭」が計画されたことに端を発す。原爆被爆1年を迎えた広島では1946（昭和21）年8月5日に、広島の復興を願う「広島平和復興祭」が行われた。NHK広島が放送した最初の原爆関連番組は、この復興祭を録音放送した番組であった（ウェブページ「広島・長崎が消えた」）。

翌年、戦後初の地方選挙で当選した濱井市長のもとで1947（昭和22）年8月6日、「第1回広島平和祭」が開催された。広島市役所、広島商工会議所、広島観光協会の三者が発起人となって広島平和協会を設立し、準備が進められた。このとき濱井市長は呉市にあった米軍軍政部に赴き、平和祭についての打診を行い、占領軍の後援を得ている（宇吹暁（1992）『平和式典の歩み』pp.9-10）。こうして始まった平和祭のプログラムの中に広島市長による「平和宣言」が含まれていた。

第1回平和祭について、ウェブページ「広島・長崎が消えた」は次のように記している。

後に原爆市長と呼ばれた浜井信三広島市長は、翌47年の原爆記念日の8月6日に第1回の「広島平和祭」を開催した。これは現在も続く平和記念式典の原型であるが、この「被爆市民の平和への意思を全世界に宣明する」というアイデアは、当時のNHK広島の石島治志局長の発案になるものであった。「原爆の体験を世界に訴えることができるのは被爆体験のある広島市民のみではないか」との思いは広島市民に共通する意識であった。式典では広島市長が「平和宣言」を發し、日本の片山哲首相、占領軍総司令官のマッカーサー元帥が異例のメッセージを寄せた。NHK広島は、式典を生放送で実況中継した。1948年の式典は、全国放送となり、同時にアメリカにも中継された。

### 2. 2 宣言文の創作プロセス

本節では、秋葉（2004）『報復ではなく和解を：いま、ヒロシマから世界へ』（pp.73-105）等を参考に、秋葉市長時代の平和宣言創作プロセスについてまとめる。

秋葉市長は、宣言文の創作にあたり、4つの意見交流会を活用していた。オフィスアワー、タウンミーティング、被爆者団体との懇談会、平和問題懇談会である。オフィスアワーは月に2～3回程度と最も頻繁に行われていた。昼休憩の時間に1時間ほど、市役所1階ロビーにおいて市民と交流するものである。タウンミーティングは月に1度程度の開催。広島市の8つの区を順に巡り、区役所または区民文化センターなどを使用して1時間半から2時間ほどその区の住民の話を開くというもの。被爆者団体との懇談会は主な団体7つと定期的に行われる交流会である。平和問題懇談会は1年に1度開かれる。専門家の何人かと有識者4～5人から話を聞き、宣言をまとめる。以下の表1は以上を整理したものである。

表1 意見交流会の一覧

名称	頻度	所要時間	場所	対象
オフィスアワー	月に2～3回程度	約1時間	市役所1階ロビー	市民
タウンミーティング	月に1度程度	約2時間	区役所 区民文化センター	区民
被爆者団体との懇談会	定期的			主な団体7つ
平和問題懇談会	年に1度程度			専門家の何人か 有識者4～5人

なお、平和宣言にかんする広島市の公式ホームページには、2016（平成28）年10月31日現在、「平和宣言に関する懇談会 出席者名簿」が公開されている。出席者の氏名と肩書は次のとおりである。

松井一實（座長）：広島市長、池田精子：公益財団法人広島平和文化センター被爆体験証言者、大西知子：広島市立口田東小学校教諭、片岡勝子：核戦争防止国際医師会議（IPPNW）日本支部事務総長・理事、叶真幹：国立広島原爆死没者追悼平和祈念館長、小溝泰義：公益財団法人広島平和文化センター理事長、志賀賢治：広島平和記念資料館長、田邊雅章：爆心地復元プロジェクト代表、坪井直：日本原水爆被害者団体協議会代表委員、水本和実：公立大学法人広島市立大学広島平和研究所副所長

## 2. 3 歴代広島市長

本節では、平和記念式典において平和宣言を読み上げてきた歴代広島市長の略歴を紹介する。

### 〔濱井信三〕

1947（昭和22）年から1954（昭和29）年、1959（昭和34）年から1966（昭和41）年の合計16年間を担当。1905（明治38）年生、1968（昭和43）年没。広島市三川町出身。市長在任時の年齢は42歳から49歳および53歳から60歳。被爆時の年齢は39歳、黄金山のふもとの自宅で被爆。被爆当時、広島市役所の配給課長の役についており、被爆直後被害にあった市民の食料や衣料の確保にあたった。市長就任後は国際的な平和会議への出席、原爆医療法の認定患者への働きかけ、原爆ドーム保存の募金運動などに取り組み、「焦土からの復興」の基礎をつくり上げた（山本（1982）『広島県大百科事典 下巻そ～わ』pp.295-296）。

### 〔渡辺忠雄〕

1955（昭和30）年から1958（昭和33）年の4年間を担当。1955（昭和30）年5月2日の広島市長当選時は56歳。1898（明治31）年頃、広島県山県郡大朝町の農家に生まれ、中央大学卒業後、大阪地方裁判所検事局に勤務。1928（昭和3）年、弁護士を開業し、1945（昭和20）年に日本自由党代議士となる。1955（昭和30）年に無所属の新人として広島市長に当選。当選当時は日本弁護士会の役員でもあり、広島県出身ではあるが弁護士の仕事が東京に集中していたため広島市になじみは薄かった（『中国新聞』1955（昭和30）年5月2日付朝刊1面および8面）。市長在任時の年齢は56歳～59歳頃。被爆時の年齢は46歳頃。

〔山田節男〕

1967（昭和42）年から1974（昭和49）年の8年間を担当。1898（明治31）年生、1975（昭和50）年没。東広島市出身。1947（昭和22）年、第一回参議院選挙に社会党公認で当選し、3期務める。市長在任時の年齢は67歳から74歳。1945（昭和20）年8月6日時点では45歳であるが、直接の被爆経験はない。ジュネーブ国際労働機構調査官や陸軍司政官などを歴任し、半生を通して世界連邦運動に取り組んでいた（山本（1982）『広島県大百科事典 下巻 そ〜わ』pp.691-692）。

〔荒木武〕

1975（昭和50）年から1990（平成2）年の16年間を担当。1916（大正5）年生、1994（平成6）年没。1940（昭和15）年に三菱重工業株式会社へ入社。1947（昭和22）年に広島市議会議員となる。市長在任時の年齢は59歳から74歳。被爆時の年齢は29歳。爆心地から3.5 km離れた三菱造船所で勤務中に被爆し、後に吐血症状があった。広島平和都市建設法の精神をもって、広島のまちづくりに尽力した（荒木（1986）『ヒロシマを世界へ』pp.9-14、316-330、著者紹介ページ）。

〔平岡敬〕

1991（平成3）年から1998（平成10）年の8年間を担当。1927（昭和2）年生、2016（平成28）年11月現在88歳。広島県出身。1952（昭和27）年に中国新聞社入社。後、同社編集局長、中国放送社長。市長在任時の年齢は63歳から70歳。被爆時の年齢は17歳、京城帝大予科2年生だった。1937（昭和12）年、9歳の時に一家で敦賀から朝鮮へと移り住み、1945（昭和20）年9月末に一家で広島へと引き揚げた。記者時代から被爆韓国人・朝鮮人の支援活動を行っており、これまでに彼らへの支援を訴える著書をいくつか執筆している（平岡（2011）『時代と記憶：メディア・朝鮮・ヒロシマ』著者紹介ページ）。次世代への継承を目的に外国13都市の子どもたちを招いた「こども平和のつどい」や「こども平和会議」などを企画・開催した（平岡（1996）『希望のヒロシマ：市長はうったえる』p.193）。

〔秋葉忠利〕

1999（平成11）年から2010（平成22）年の12年間を担当。1942（昭和17）年生。2016（平成28）年10月現在73歳。東京都荒川区出身。1990（平成2）年に衆議院議員に当選。衆議院議員を3期、広島市長を3期務める。市長在任時の年齢は56歳から67歳。被爆時の年齢は2歳で、千葉市へ疎開中だった。1945（昭和20）年7月6日、疎開先の千葉市で空襲にあっている。市長就任以前より、タフツ大学数学科准教授のときに立案したアキバプロジェクトなどを通じて広島市の平和活動へ関わっていた（秋葉（1986）『真珠と桜：「ヒロシマ」から見たアメリカの心』pp.17-18）。20年近くにわたる在米経験があり、同時通訳者となるなど国際的に活躍。アメリカ側の「ヒロシマ」に対する考え方に言及した著書が複数ある（秋葉（1986）『真珠と桜：「ヒロシマ」から見たアメリカの心』pp.136-155、著者紹介ページ）。

〔松井一實〕

2011（平成23）年から現在まで担当。1953（昭和28）年生。2016年10月現在61歳。広島市東区牛田の出身、労働省に務める（ウェブページ「市長のプロフィール」（広島市ホームページ内））。市長在任時の年齢は58歳。母親が被爆しており、初の被爆2世の市長。平和に関する会議を広島で開催すべく取り組んでいる（ウェブページ「特集 ヒロシマ 市長・知事に聞く」）。

次ページの表2は、以上の記述を整理したものである。

表2 1947(昭和22)年から2015(平成27)年までの歴代広島市長

市長在任時	市長氏名	在任時年齢	原爆投下時の年齢	原爆投下時の状況
1947～54	濱井信三	42～49歳	39歳	黄金山のふもとの自宅で被災
1955～58	渡辺忠雄	56～59歳頃	46歳頃	未詳
1959～66	濱井信三	53～60歳	同上	同上
1967～74	山田節男	67～74歳	46歳	被爆していない
1975～90	荒木 武	59～74歳	29歳	三菱造船所で勤務中に被爆、吐血症状あり
1991～98	平岡 敬	63～70歳	17歳	朝鮮(現ソウル)在住
1999～2010	秋葉忠利	56～67歳	2歳	千葉在住
2011～15	松井一實	58～62歳	—	母親が被爆

### 3. 文字数の変遷

この章からは平和宣言に対する分析結果を記す。第3章では、平和宣言の文字数がどのように変化したかについて明らかにする。

平和宣言は読み上げられるものだが、事前に原稿が準備され、8月6日に市長によって読み上げられた後、広島市の公式ホームページに掲載される。ここで「文字数」と言っているのは、同ページに掲載されている漢字仮名交じり文で書かれた宣言文の文字数を指す。なお、たとえば「御霊(みたま)」と書かれている場合、(みたま)の部分は数えない。また、宣言冒頭の「平和宣言」および末尾の「年月日～市長名」の部分も数えていない。以上により各年の平和宣言の文字数の変遷を示したのが、次ページの表3である。

#### 3.1 長文化する平和宣言

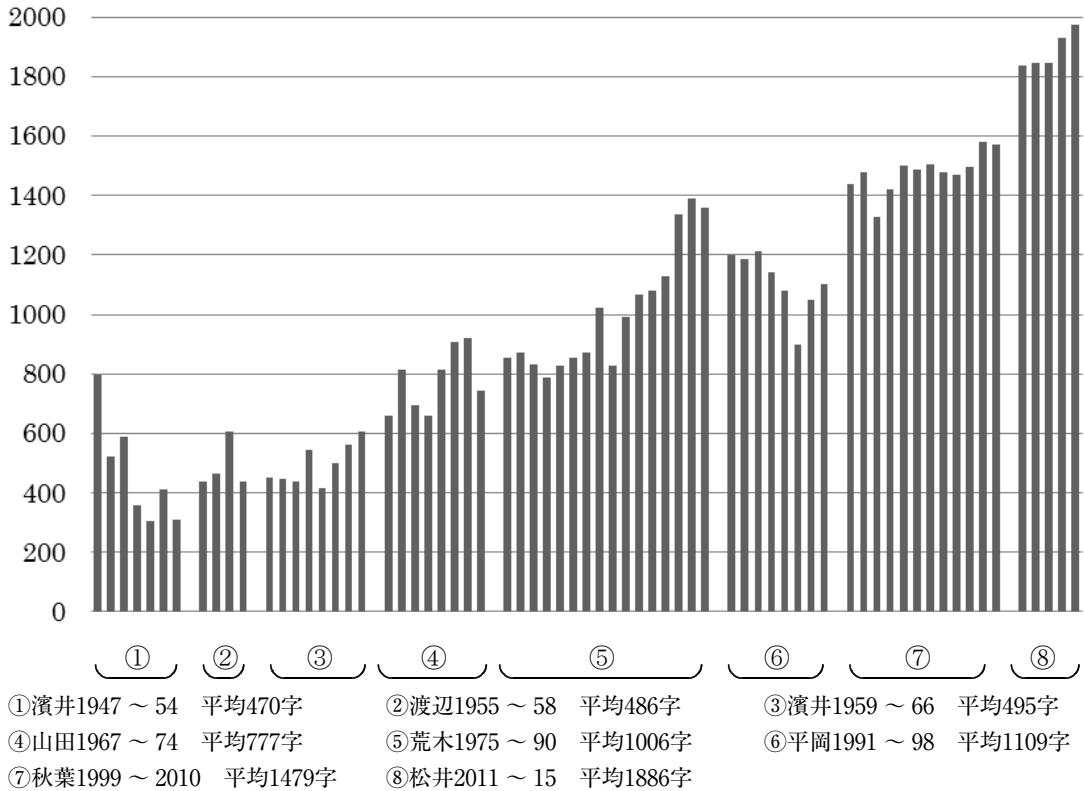
文字数は年ごとに異なる。被爆70年にあたる2015(平成27)年の平和宣言の文字数は過去最大の1973字であった。他方、過去最小の文字数は1952(昭和27)年の304字である(広島市公式ホームページは1954年の平和宣言を「歴代最短」と記している)。以下に、全文掲げる。／は改行を示す。

時は空しく過ぎるものではない。7年の間、私たちは心にうけた恐ろしい傷あとをじっとみつめてきた。思えば人間の犯しうる過失の余りにも深刻なのに戦りつせずにはいられない。／けれども私達は人間の善意と寛容とを信じている。／己の尊厳を汚すことなく、むしろそれを生かすことによって、かえって世界に通じる道のあることを信じたい。／ひとりの心の中に愛情の火を点じ、ふたりの心の中にそれを受けつぎ、やがてはそれがひとつの聖火へと燃えつづけると、きっと世界は良心の環によってひとつに結ばれるに違いない。／私達は素直に反省し、このことを個人としての、また市民としての責任において考え、かつ実践することを尊い精霊たちの前に誓うものである。

一読して、これが広島市の平和宣言だと気付く人は少ないのではないだろうか。1952(昭和27)年の宣言は、それまで必ず述べられてきた「1945年8月6日に原子爆弾が広島に投下された」という事実について一切触れていない。あくまで抽象的に表現している。

以下は、過去最長の平和宣言全文である。2015(平成27)年に松井市長によって読み上げられたこ

表3 文字数の変遷



の平和宣言は、1973字の長さであった。

私たちの故郷には、温かい家族の暮らし、人情あふれる地域の絆、季節を彩る祭り、歴史に育まれた伝統文化や建物、子どもたちが遊ぶ川辺などがありました。1945年8月6日午前8時15分、その全てが一発の原子爆弾で破壊されました。きこ雲の下には、抱き合う黒焦げの親子、無数の遺体が浮かぶ川、焼け崩れた建物。幾万という人々が炎に焼かれ、その年の暮れまでにかけがえのない14万もの命が奪われ、その中には朝鮮半島や、中国、東南アジアの人々、米軍の捕虜なども含まれていました。／辛うじて生き延びた人々も人生を大きく歪められ、深刻な心身の後遺症や差別・偏見に苦しめられてきました。生きるために盗みと喧嘩を繰り返した子どもたち、幼くして原爆孤児となり今も一人で暮らす男性、被爆が分かり離婚させられた女性など——苦しみは続いたのです。／「広島をまどうてくれ！」これは、故郷や家族、そして身も心も元通りにしてほしいという被爆者の悲痛な叫びです。／広島県物産陳列館として開館し100年、被爆から70年。歴史の証人として、今も広島を見つめ続ける原爆ドームを前に、皆さんと共に、改めて原爆被害の実相を受け止め、被爆者の思いを噛みしめたいと思います。／しかし、世界には、いまだに1万5千発を超える核兵器が存在し、核保有国等の為政者は、自国中心的な考えに陥ったまま、核による威嚇にこだわる言動を繰り返しています。また、核戦争や核爆発に至りかねない数多くの事件や事故が明らかになり、テロリストによる使用も懸念されています。／核兵器が存在する限り、いつ誰が被爆者になるか分かりません。ひとたび発生した被害は国境を越え無差別に広がります。世界中の皆さん、被爆者の言葉とヒロシマの心をしっかり受け止め、自らの問題として真剣に考えてください。／当時16歳の女性は「家族、友人、隣人などの和を膨らませ、大きな和に育てていくことが世界

平和につながる。思いやり、やさしさ、連帯。理屈ではなく体で感じなければならない。」と訴えます。当時12歳の男性は「戦争は大人も子どもも同じ悲惨を味わう。思いやり、いたわり、他人や自分を愛することが平和の原点だ。」と強調します。／辛く悲しい境遇の中で思い悩み、「憎しみ」や「拒絶」を乗り越え、紡ぎ出した悲痛なメッセージです。その心には、人類の未来を見据えた「人類愛」と「寛容」があります。／人間は、国籍や民族、宗教、言語などの違いを乗り越え、同じ地球に暮らし一度きりの人生を懸命に生きるのです。私たちは「共に生きる」ために、「非人道性の極み」、「絶対悪」である核兵器の廃絶を目指さなければなりません。そのための行動を始めるのは今です。既に若い人々による署名や投稿、行進など様々な取組も始まっています。共に大きなうねりを創りましょう。／被爆70年という節目の今年、被爆者の平均年齢は80歳を超えました。広島市は、被爆の実相を守り、世界中に広め、次世代に伝えるための取組を強化するとともに、加盟都市が6,700を超えた平和首長会議の会長として、2020年までの核兵器廃絶と核兵器禁止条約の交渉開始に向けた世界的な流れを加速させるために、強い決意を持って全力で取り組みます。／今、各国の為政者に求められているのは、「人類愛」と「寛容」を基にした国民の幸福の追求ではないでしょうか。為政者が顔を合わせ、対話を重ねることが核兵器廃絶への第一歩となります。そうして得られる信頼を基礎にした、武力に依存しない幅広い安全保障の仕組みを創り出していかなければなりません。その実現に忍耐強く取り組むことが重要であり、日本国憲法の平和主義が示す真の平和への道筋を世界へ広めることが求められます。／来年、日本の伊勢志摩で開催される主要国首脳会議、それに先立つ広島での外相会合は、核兵器廃絶に向けたメッセージを発信する絶好の機会です。オバマ大統領をはじめとする各国の為政者の皆さん、被爆地を訪れて、被爆者の思いを直接聴き、被爆の実相に触れてください。核兵器禁止条約を含む法的枠組みの議論を始めなければならないという確信につながるはず。／日本政府には、核保有国と非核保有国の橋渡し役として、議論の開始を主導するよう期待するとともに、広島を議論と発信の場とすることを提案します。また、高齢となった被爆者をはじめ、今この時も放射線の影響に苦しんでいる多くの人々の苦悩に寄り添い、支援策を充実すること、とりわけ「黒い雨降雨地域」を拡大するよう強く求めます。／私たちは、原爆犠牲者の御霊に心から哀悼の誠を捧げるとともに、被爆者をはじめ先人が、これまで核兵器廃絶と広島の復興に生涯をかけ尽くしてきたことに感謝します。そして、世界の人々に対し、決意を新たに、共に核兵器廃絶と世界恒久平和の実現に向けて力を尽くすよう訴えます。

実に多様な内容が盛り込まれている。これは被爆から70年が経過する中で平和宣言の在り方、意味合いが変化してきたことを如実に物語っている。本論文は言語学的方法による分析を行うことを目的としているので、それ以外のことには立ち入らぬべきだが、以下の1点のみ、ここで触れておきたい。

それは、1970年代に入り（山田市長在任時）、それまでの平和宣言に対する批判が出てきた、という事実である。『中国新聞』1970（昭和45）年6月19日付、同1972（昭和47）年7月2日付紙面には「例年の内容は格調高い立派なものだが、抽象的である。もっと具体性を持たせるべきである」「平和理念だけでなく、広島生の声を織り込むべきだ」などの意見が掲載された（以上については、新宅匠（2012）「『平和』の語りの変遷—広島平和宣言を中心に—」に詳しい）。上に掲げた2つの宣言文を読めば、批判が的を射た意見として受け止められ、その方向で平和宣言が創作され、読まれるようになったことが分かる。

### 3. 2 長文化のパターン

さて、文字数の変遷には確かな傾向がみられる。表3を見れば分かるように、文字数は緩やかに増加してきている。しかし、「緩やかに増加」とは書いたが、2つのはっきりとした傾向がある。1つは、各市長の任期終盤あたりに増える例である。③の濱井市長、⑤荒木市長、⑦の秋葉市長、⑧の松井市長があてはまる。もう1つは、市長が交代する際に、一気に文字数が増える例である。⑥平岡市長が

ら⑦秋葉市長、⑦秋葉市長から⑧松井市長に交代した際、急激に文字数が増えている。表3の下部に、市町ごとの平均文字数を示している。これを大まかに整理すれば、以下のようにまとめることができる。

- ①濱井市長②渡辺市長③濱井市長時代（1947～66）は平均500字弱で安定し、
- ④山田市長時代（1967～74）に増加傾向を見せ始め（平均800字弱）、
- ⑤荒木市長⑥平岡市長時代（1975～98）に1000字を超すことが常態化し、
- ⑦秋葉市長時代（1999～2010）に1500字前後、
- ⑧松井市長時代（2011～2015）に1900字前後へと増加した。

## 4. 語に焦点を当てた分析

第4章では、平和宣言に使用される語・語彙の変遷について4つの視点から分析する。第1節では頻出語彙の出現度数、第2節ではそれぞれの市長に特徴的なことば、第3節では構成要素対応表を用いた要素の変遷、第4節では対応分析を用いた出現パターンの傾向をみる。

### 4. 1 頻出語彙の出現度数

第1節では、68の平和宣言に含まれるすべての語を対象とし、頻出語彙上位150語を抽出する。抽出のために用いたのはテキスト分析ソフト『KH.Coder.2.X』である。なお、活用のある語は抽出される際に基本形に直されている。

次ページの表4を見ると、1位の「世界」は393回、2位の「核兵器」は346回使用されていることが分かる。この2語は、1つの宣言において、平均して5回以上使用される。同じように、3位の「平和」は4回以上、4位「被爆」と5位「人類」は3回以上、6位「核」、7位「戦争」、8位「廃絶」、9位「原爆」は、2回以上使用されている。いわゆる「定番」語彙である。

### 4. 2 歴代市長に特徴的な語彙

次に、市長ごとの傾向を探る。『KH.Coder.2.X』を用いて市長ごとに特徴的な語を抽出する（表5）。表内の数値は、それぞれの語と各市長との関連をあらわすJaccardの類似性測度である。この値が大きい順に10語選択されている（Jaccardの類似性測度は0から1までの値をとり、関連が強いほど1に近づく）。ここに示されている語は、データ全体に比して、各市長において特に高い確率で出現している語である。

各市長の特徴語上位10位の中には、複数の市長で重なる語もある。複数の市長に表れているのは、「被爆」「廃絶」「市民」「平和」「戦争」「霊」「弔う」「深い」「世界」「人類」「ヒロシマ」「核」「核兵器」「廃絶」「被爆」「国際」「広島」「すべて」の18語である。

他方、1人の市長のみに現れる語は39語であり、重なる語数を大きく上回る。以下、市長ごとの特徴語について、簡単な考察を試みる。

#### 〔濱井市長〕

濱井市長の宣言において、前期（1947年→1954年）と後期（1959年→1966年）で共通する語は「戦争」である。前期では「罪悪」「戦争」などが特徴的であり、「原子力」「放棄」など、核・核兵器に関連する語は後期から現れる。また前期の「尊い」、後期の「霊」「弔う」「生命」などから、濱井市



表4 頻出語上位150語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
世界	393	努力	48	時代	32	基づく	22
核兵器	346	すべて	46	生存	32	原子力	22
平和	302	開催	46	地域	32	特別	22
被爆	258	新た	46	全面	31	放棄	22
人類	216	道	46	哀悼	30	霊	22
核	178	心	45	安全	30	歳	21
戦争	163	前	43	危機	30	事実	21
廃絶	162	決意	42	行動	30	責任	21
原爆	139	声	41	立つ	30	米国	21
ヒロシマ	130	誓う	41	ソ	29	放射能	21
市民	107	連帯	41	超える	28	アジア	20
広島	103	御霊	40	日本国	28	皆さん	20
都市	96	国	40	兵器	28	考える	20
広島	95	未来	40	生きる	27	今や	20
国際	87	核保有	39	精神	27	再び	20
訴える	79	多く	39	誠	27	社会	20
今	76	日本	39	捧げる	27	首脳	20
人々	71	記念	38	理念	27	人道	20
犠牲	70	繰り返す	38	歴史	27	世代	20
月	66	援護	37	心から	26	地獄	20
実現	65	確立	37	世論	26	内外	20
会議	64	向ける	37	全て	26	明らか	20
求める	61	恒久	37	交渉	25	役割	20
強い	60	今日	37	使用	25	加盟	19
政府	60	深い	37	一瞬	24	現実	19
軍縮	57	思い	36	自ら	24	実相	19
年	57	破壊	36	惨禍	23	充実	19
本日	57	力	36	新しい	23	多数	19
迎える	55	拡散	35	人	23	はじめ	18
実験	55	世紀	35	生命	23	科学	18
体験	55	爆弾	35	宣言	23	完全	18
禁止	53	思う	34	弔う	23	共存	18
国家	53	持つ	34	伝える	23	始める	18
人間	53	総会	34	破滅	23	秩序	18
国連	52	長崎	34	目指す	23	締結	18
市長	52	米	34	いま	22	訪れる	18
条約	50	憲法	32	拡大	22		
地球	50	原子	32	核軍縮	22		

表5 各市長の特徴語

浜井①		渡辺		浜井②		山田	
地上	.096	原水爆	.111	本日	.123	世界	.114
市民	.092	徐々に	.097	完全	.113	人類	.110
平和	.091	叫ぶ	.088	戦争	.094	戦争	.106
尊い	.091	生存	.088	霊	.094	人間	.089
建設	.080	放射能	.085	弔う	.093	核	.078
我	.075	霊	.083	原子力	.082	原爆	.073
罪悪	.074	弔う	.082	放棄	.081	深い	.060
戦争	.073	悲劇	.079	生命	.081	ヒロシマ	.060
真実	.068	死没	.073	深い	.080	繰り返す	.060
確立	.061	悲惨	.071	民族	.078	すべて	.060
荒木		平岡		秋葉		松井	
ヒロシマ	.206	核兵器	.128	核兵器	.204	被爆	.134
平和	.195	核	.105	世界	.163	歳	.078
世界	.156	平和	.100	被爆	.145	人々	.076
核	.140	国際	.070	廃絶	.144	廃絶	.075
核兵器	.135	実現	.061	都市	.120	思い	.068
人類	.124	実験	.060	市民	.095	今	.066
廃絶	.124	広島	.058	会議	.089	広島	.065
被爆	.115	地球	.056	月	.069	皆さん	.059
軍縮	.104	アジア	.054	全て	.065	当時	.055
国際	.103	国家	.051	市長	.065	家族	.051

長の宣言は全体的に慰霊の意味合いが強いものであると推察される。原文を引用する。下線は本論文の筆者による。以下同様。

けだし戦争の惨苦と罪悪とを最も深く体験し自覚する者のみが苦悩の極致として戦争を根本的に否定し、最も熱烈に平和を希求するものであるから。[1947（昭和22）年]

本日、広島市原爆被災10周年を迎えるにあたり、われわれは、おごそかに原爆死没者の諸霊を弔うとともに、あの悲惨な体験にもとづいて叫びつづけて来た世界平和への悲願と決意を重ねて世界に向かって訴えるものである。[1955（昭和30）年]

#### 〔渡辺市長〕

渡辺市長の宣言において、もっとも特徴的な語は「原水爆」である。これは1954（昭和29）年3月1日に実施されたビキニ環礁でのアメリカの水素爆弾実験「キャッスル作戦」の影響だと考えられる。この作戦によって日本のマグロ漁船第五福竜丸が被爆した。この事件がきっかけとなり、日本では反核運動が興隆した。こうした運動などにより広島は原水爆の開発・拡散に敏感になっていたのだろう。

他方、渡辺市長の特徴語上位10語は「霊」「弔う」をのぞいてすべて他の市長の特徴語とは重ならない。たとえば3位の「叫ぶ」は以下のような文脈で見れる。

真実の世界平和が恒久的に打ち立てられるのを見るまでは、われわれは、全世界の人々にこの真実を伝えることを大きな義務と考え、「広島悲劇をふたたび繰返すな」と叫びつづけるものである。[1955 (昭和30) 年]

「広島悲劇をくりかえすな」と叫びつづけてきたわれわれの声に応じ、今日漸く世界各地より共鳴と激励が数多く寄せられ、原水爆禁止運動は次第に力強い支持を得ており [1956 (昭和31) 年]

#### 〔山田市長〕

山田市長の宣言では、「世界」が最も特徴的な語である。そして山田市長の宣言には、彼の信条とした「世界連邦主義」の影響がみられる表現が多々見られる。「世界法」(1967・70 (昭和42・45) 年)、「正義と世界新秩序の支配する社会の建設」(1968 (昭和43) 年)、「世界市民意識」(1969～71 (昭和44～46) 年)、「1974 (昭和49) 年)、「一切の軍事主権を人類連帯の世界機構に移譲し、解消すべき」(1971 (昭和46) 年)、「世界国家」(1973 (昭和48) 年) などである (このことについては、宇吹 (1992) 『平和式典の歩み』において既に指摘されている)。

今や国民国家から世界国家理念移行への時代である。人類生存条件の根本的な改善は、全世界の連帯と協力にまつほか道のないことをあえて断言する。[1973 (昭和48) 年]

#### 〔荒木市長〕

荒木市長の平和宣言の特徴語は、ほとんどが他の市長と重なる。唯一重ならない語が「軍縮」である。これは荒木氏が市長に就任した翌年の1978 (昭和53) 年から始まった「国連軍縮特別総会」に対する期待、あるいはその報告が、宣言において数多く取り上げられたことが原因である。

国連は、明年5月、国連軍縮特別総会の開催を予定している。世界は、その成果に大いなる期待を寄せているのである。[1977 (昭和52) 年]

広島市長は、長崎市長とともに、両市民を代表してこの軍縮特別総会に列席し、あわせて国連本部で画期的な「ヒロシマ・ナガサキ原爆写真展」を実現した。[1978 (昭和53) 年]

#### 〔秋葉市長〕

秋葉市長時代の平和宣言に特徴的な語として「会議」がある。以下に秋葉市長が取り上げた会議を全て掲げる。「ハーグの平和会議」(1999 (平成11) 年)、「世界平和連帯都市市長会議」(2000～2001 (平成12～13) 年)、「平和市長会議」(2003～2010 (平成15～22) 年)、「核不拡散条約再検討会議」(2003～2005・2009・2010 (平成15～17・21・22) 年)、「全米市長会議」(2004～2006・2010 (平成16～18・22) 年)、「ジュネーブでの軍縮会議」(2005 (平成17) 年)、「G8 下院議長会議」(2008 (平成20) 年)、「2020核廃絶広島会議」(2010 (平成22) 年)。以上のとおり、秋葉市長時代の宣言には、毎年のように何らかの (年によっては複数の) 会議が取り上げられ、軍縮・核廃絶にかんする議論が深まり、その機運が高まることを期待する旨が述べられている。このことは、東西冷戦が終結し、少しずつではあるが (核) 軍縮への世界的な取り組みが始まったことを反映していよう。

#### 〔松井市長〕

松井市長時代の平和宣言に特徴的な語として「歳」がある。具体例を見てみよう。

当時13歳だった男性は、打ち明けます。——「8月5日は、中学2年生の私にとっては久しぶりに一日ゆっくり休める日曜日でした。仲よしだった同級生を誘って、近くの川で時間の経つのも忘れて夕方まで、砂場でたわむれ、泳いだのですが、真夏の暑いその日が彼との出会いの最後だったのです。」[2011（平成23）年]

当時16歳だった女性の言葉です。——「体重40キロの私の体は、爆風に7メートル吹き飛ばされ意識を失った。意識が戻ったとき、辺りは真っ暗で、音の無い、静かな世界に、私一人、この世に取り残されたように思った。私は、腰のところにボロ布をまとっているだけの裸体で、左腕の皮膚が5センチ間隔で破れクルクルッと巻いていた。右腕は白っぽくなっていた。顔に手をやると、右頬はガサガサしていて、左頬はねっとりしていた。」[2011（平成23）年]

松井市長は、就任した2011（平成23）年から、毎年必ず、被爆者数名の体験談を平和宣言に引用している。その際、何歳のときにどんなことがあったか、という形式をとることを基本としており、それが「歳」頻出を要因である。なお、被爆体験の引用について、広島市の公式ホームページ内「平成26年の平和宣言の作成に際し寄せられた「被爆体験談や平和への思い」集」には、次のような説明がなされている。

本市では、被爆の実相を風化させず、国内外のより多くの人々と核兵器廃絶に向けた思いを共有していくため、被爆者の体験と平和への願いを、次世代、そして世界中の人々に伝える取組を進めています。その一環として、平成23年から、平和宣言を作成する際、被爆者の「被爆体験談や平和への思い」を募集し、その一部を宣言文に掲載しています。

以上、本節では市長ごとに特徴的な語を確認した。本節での作業を通じて、平和宣言に対する（1）市長個人の思想信条および（2）世界情勢・社会情勢の影響が明らかになった。

#### 4. 3 構成要素対応表による分析

本節では、宣言の内容がどのように変わっていったかをたどる為、68の宣言文について、構成要素の有無を比較する（表6）。具体的には、「破滅/滅亡/絶滅」「広島」「ヒロシマ」「世論」「国連」「米国」「8月6日」「日本政府」「憲法」「廃絶」「捧げる」の11の要素について調べる。その要素が見られる場合には表に「○」を記入する。ひとつの宣言文に対象となる要素が複数回表れるときは、回数を記入する。また対象となる要素について他とは異なる特徴的な表現で表されている場合、その表現を表中に記入する。

##### 4. 3. 1 恒常的に用いられる「破滅/滅亡/絶滅」「広島」

「破滅/滅亡/絶滅」では、主語となる事物の未来の予測として述べられている場合のみを選択した。この要素はどの時代にも使用が見られ、全体を通して恒常的に用いられる。「破滅/滅亡/絶滅」以外では「自滅」が多く使われている。この「自滅」という要素は1956（昭和31）年の渡辺市長による宣言に初めて現れるが、続く濱井市長・山田市長時代（1959（昭和34）年→1974（昭和49）年）に頻繁に使用されている。その数、濱井市長4回、山田市長5回である。具体例を挙げよう。

今や人々は、原子戦争は勝利の見込みのない戦争であって、それは全人類の自滅を意味するものであることを

深く認識しなければならない。[1960 (昭和35) 年]

原爆被災当時、われわれの直感した人類自滅の不安をわれわれはここに改めて呼びもどし、その初心に立ちかえって広島を広く世界の声とすることこそ、市民に課せられた任務であり、同時に世紀の危機を自覚する者の使命である。[1968 (昭和43) 年]

恒常的な要素といえる「破滅/滅亡/絶滅」であるが、平岡市長以降、次第に使用が減りつつある。松井市長は、2011年から5年間、1度も「破滅/滅亡/絶滅」を使用していない。

「破滅/滅亡/絶滅」と同様に、「広島」(単純語として使用されているもののみ。「広島」を含む複合語(「広島市」「広島市民」等)は除外)も時代を通じて使用されてきた恒常的な要素である。さて、その「広島」だが、1969 (昭和44) 年から1981 (昭和56) 年までは新しく登場した「ヒロシマ」に役割を奪われたかに見える。しかし1981 (昭和56) 年以降は「ヒロシマ」の使用が多くみられる年においても「広島」の使用は見られる。「広島」と「ヒロシマ」とが異なる意味を持ち、区別して使われ始めたものと解釈される。

#### 4. 3. 2 一時的に使用された「ヒロシマ」「世論」

恒常的な要素「広島」とは異なり、(単純語として使用される)「ヒロシマ」は1970年代から1980年代にかけて重用された要素である。

これこそがふたたびこの地球上に「ヒロシマ」を繰り返さないための砦であり、現代の歴史に生きる者の使命である。[1969 (昭和44) 年]

「ヒロシマ」の使用が増えるのは、荒木市長時代で、荒木市長が読み上げた16の宣言の中に76回の使用が確認される。平均使用回数は4.75回、全体を通して最も使用回数が多いのは1988年の平和宣言で、その回数は11回である。

平和を求め、ヒロシマは語り、ヒロシマは訴え続けなければならない。[1979 (昭和54) 年]

「世論」は1958 (昭和33) 年の平和宣言に初めて現れる。その後19年間、「世論」は使用されず、次に登場するのは1978 (昭和53) 年、荒木市長在任時の平和宣言である。荒木市長時代の16年間、「世論」は15回使用され、おおよそ1つの宣言に1回使用されている。そして、ほとんどが国内の世論ではなく、全世界的な規模の世論を指すものであることに特徴がある。

いまこそ唯一の被爆国であるわが国は、国際社会における平和の先覚者として国際世論の喚起に努め、核兵器の廃絶と戦争放棄への国際的合意の達成を旨として、全精力を傾注すべきときである。[1978 (昭和53) 年]

#### 4. 3. 3 近年使用の目立つ語

本項では、近年使用の目立つ「8月6日」「日本政府」「憲法」「廃絶」「捧げる」について簡略に記述する。

「8月6日」が初めて現れたのは1947 (昭和22) 年の最初の平和宣言である。その後は、この語をよく用いる市長と用いない市長とがいた、と総括できる。直近の2市長(秋葉市長・松井市長 (1999

表6 構成要素対応表

市長	西暦	破滅/滅亡/ 絶滅	広島	ヒロシマ	世 論	国 連	米 国	8月6日	日 本 政 府	憲 法	廃 絶	捧 げ る
濱井	1947	○、終末	○					2				
濱井	1948	○	第二の広島									
濱井	1949	○	第二の広島					○	日本 国会			
濱井	1951	○						○				
濱井	1952											
濱井	1953	2	○									
濱井	1954	○										
渡辺	1955	崩壊に導く	○									
渡辺	1956	自滅	○									
渡辺	1957	基盤をおび やかす										
渡辺	1958	○	ひろしま		2							
濱井	1959	○、自滅										
濱井	1960	自滅	○									
濱井	1961	○、自滅										
濱井	1962	○	○									
濱井	1963	○	○				○					
濱井	1964	○					○	○				
濱井	1965	2										
濱井	1966	自殺						○				
山田	1967	○、自滅	○					○				
山田	1968	○、自滅	2									
山田	1969	自滅		○								
山田	1970	自滅		5							○	
山田	1971	○	○	○					○		○	
山田	1972			○、ヒロシマの心		○	2		○		○	
山田	1973		○	○、ヒロシマの心2			○、 米政府				○	
山田	1974	自殺的破滅		○		○	2		○		○	
荒木	1975	○	○	2				○			2	
荒木	1976	2、せん滅、 終えん	○	3		2	○				2	
荒木	1977	せん滅	3	3、ヒロシマの心		3	○				4	
荒木	1978	○		2	○	4	○				2	
荒木	1979			7		○	○	○	○		2	
荒木	1980	2	○	2、ヒロシマの心	○	3	3	あの日	○		2	
荒木	1981	2	○				○				3	

荒木	1982	○、終焉	5	10		2	○	あの日	○		2	
荒木	1983	2	○	2、ノーモア・ヒロシマ	○	2	2				3	
荒木	1984	2	○	ヒロシマの心	2		2	○			3	○
荒木	1985	2	2	3、ヒロシマの心、 ノーモア・ヒロシマ2	○		2		○		3	
荒木	1986	終末	5	5	○	○	3	○	○		3	
荒木	1987	自滅	3	5、ヒロシマの心	○	2	2	○	2		4	
荒木	1988	○	4	8、ヒロシマの心、 ヒロシマの体験、 ノーモア・ヒロシマ	3	3	○	○	○	○	4	
荒木	1989	○	4	5、ヒロシマの心	2		2、米国 政府		2	○	3	
荒木	1990	○	3	7	2		3		2	○	5	
平岡	1991	2	2	5			○	○	○	○	2	
平岡	1992	○	3	5		3	○		○	○	3	
平岡	1993	2	3	○	○	○	○	○	○		○	
平岡	1994		○	2					○		○	
平岡	1995		2						○	○	3	
平岡	1996		2		○					○	3	
平岡	1997		6				○		○			
平岡	1998	○	○	5	○				○		3	
秋葉	1999	3	○						○	3	7	○
秋葉	2000		7				○	2、 地獄の日	○	○	4	○
秋葉	2001		2	○				2	○	○	5	○
秋葉	2002	○	3				2		2	○		○
秋葉	2003		3			○	3	○	○	○	3	○
秋葉	2004			○		2	2	○、あの日	○	平和 憲法	2	○
秋葉	2005	○				4	2	○、あの日	2	○		○
秋葉	2006	壊滅					2		○	平和 憲法	5	○
秋葉	2007	○		○		○	3		2		3	○
秋葉	2008		○			○	3	○	2	○	4	
秋葉	2009					4	○		○	○	8	○
秋葉	2010	○		○		3	3	○	○	平和 憲法	8	○
松井	2011		4				○		2		4	○
松井	2012		6	4				○、あの日	○		7	○
松井	2013		2	2		○	○	○、あの日	2	○	6	○
松井	2014		2	3		○	○	○、あの日2	○	○	3	○
松井	2015		4				○	○	○	○	6	○

(平成11)年→2015(平成27)年))は、「8月6日」を頻用している。

続いて「日本政府」について。濱井市長、渡辺市長、山田市長の時代(1947(昭和22)年→1974(昭和49)年)、「日本政府」はほとんど使用されなかった。しかし、1980(昭和55)年の荒木市長の平和宣言以降、現在まで、ほぼ毎年使用されている。

「憲法」も、近年定着した語といえる(この場合「憲法」は日本国憲法のみをさし、他国のものは対象としていない)。「憲法」が頻用され始めたのは、荒木市長時代の後半、1988(昭和63)年からである。その後は、ほぼ毎年使用されている。

「廃絶」は1970年の山田市長のときに初めて使用された。

われわれは、あの日以来、ヒロシマの人間惨禍にもとづき、核兵器の廃絶と戦争の放棄を訴えつづけてきた。[1970(昭和45)年]

「廃絶」はこれ以後、現在に至るまで1997年をのぞいてすべての年で使用されている。上記の例もそうであるが、「廃絶」は「核兵器」を受けるかたちで用いられることがほとんどである。

「捧げる」も、使用傾向がはっきりした語である。濱井・渡辺・山田・荒木・平岡市長時代(1947(昭和22年)→1998(平成10)年)の約50年間、「捧げる」が使われたのは1度だけであった。しかし、秋葉・松井市長は、この語を、毎年必ず使用している「秋葉市長が使い始めた語を松井市長が継承した」明確な事例の1つである。

#### 4. 4 共起ネットワーク

4.3.3で述べた「核兵器」と「廃絶」のように、ある単語とある単語とが強く結びついて使用される(共起する)例は多い。以下に、『K.H.Coder.2.X』を用いた「共起ネットワーク」の結果を示す(図1)。共起ネットワークとは同じ段落に一緒に出現する語同士を線で結んだ図であり、語と語の結びつきを探るのに適している。図1では左下に位置する「核兵器」と「廃絶」がひじょうに近い位置で結ばれており、この2語が結びついて使用されていることが裏付けられる。

#### 4. 5 対応分析による分析

ここでは出現度数上位60語について、『K.H.Coder.2.X』を用いて行った対応分析(コレスポネンダンス分析)の結果を示す(図2)。対応分析とは出現パターンに応じて2次元の空間に対象語彙を布置するものである。同時に出現しやすい語同士は出現パターンが似ていると判断され、近くに布置される。とりたてて特徴のない語が、原点(0.0)に配置され、特徴的な語ほど原点から離れた位置へと配置される。

図2では、出現度数上位60語と市長の同時布置を行っており、市長と上位60語間の関係を読み取れる。表の左上部(A)に濱井市長と渡辺市長、中心部(B)に山田市長と荒木市長と平岡市長、右上部(C)に秋葉市長と松井市長が布置されている。

Aグループでは濱井市長のほうが渡辺市長よりも原点から遠く、より特徴的だといえる。Aグループ付近に位置する語として「戦争」「人間」「爆弾」などがあり、これらは濱井市長の宣言の特徴語である。

Bグループでは、平岡市長が最も原点に近く、彼の宣言が全宣言の中で最も特徴がなく普遍的な語を選択していることになる。山田市長はBグループの中でも濱井、渡辺市長寄り、荒木市長はどの市長からも離れた位置にいる。原点を取り囲む「広島」「世界」「地球」「誓う」「繰り返す」「心」はど



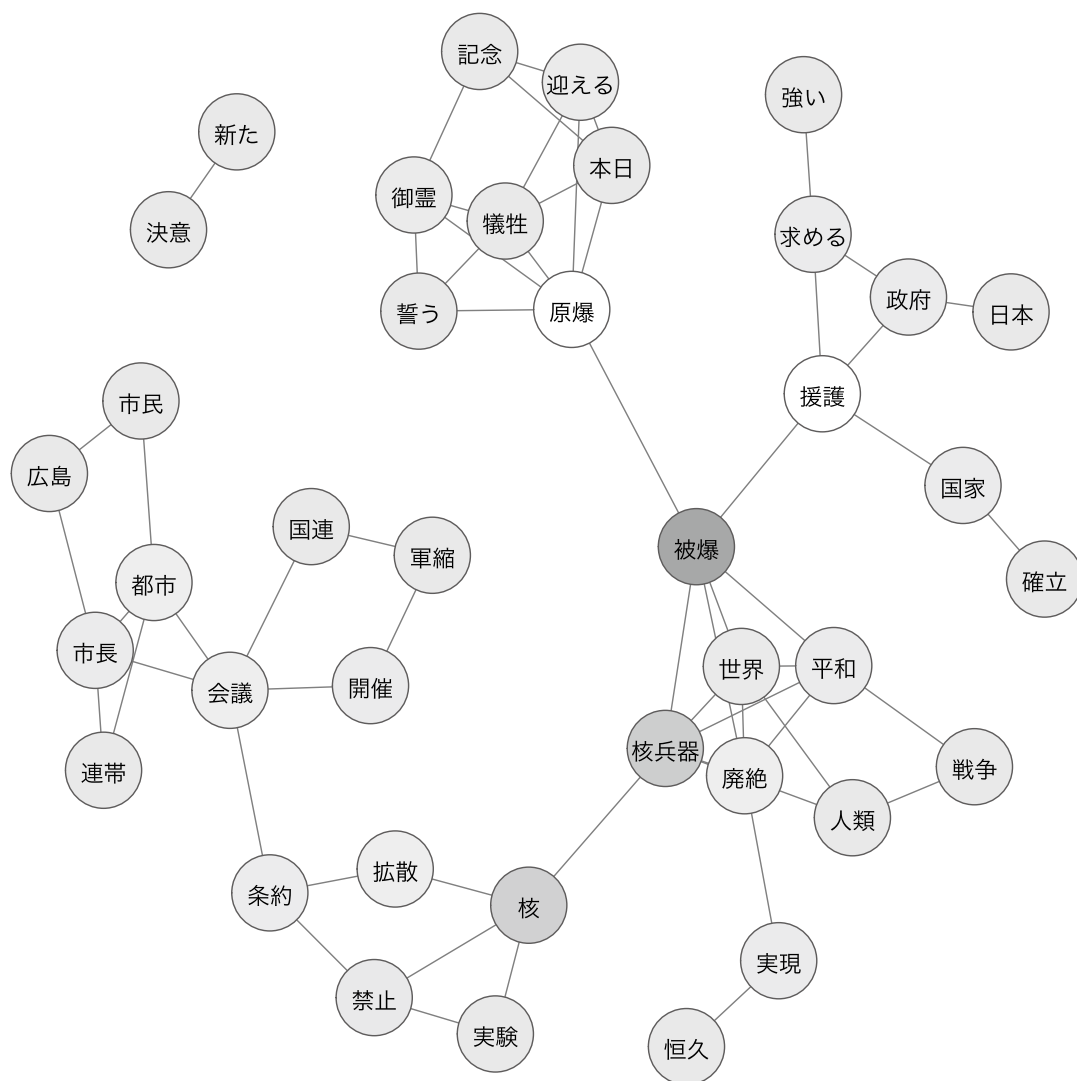


図1 共起ネットワーク

の市長においても出現率が高い語であり、かつ、ともに現れやすい語でもある。一方、表の最下部中心に位置する「軍縮」は相対的な出現率が高いが、使用者が荒木市長に偏った語であることが分かる。

Cグループでは、秋葉市長と松井市長は近い位置にいる。これは2人の選択する語が似通っていることを示す。2人を囲む「拡散」「核兵器」「被爆」「条約」「国」はCグループの時期において出現率が高まった語ということになる。

以上の他、図2から読み取れる大きな傾向として、次のことを指摘しておきたい。被爆してそれほど年数の経っていないAグループの平和宣言では、「戦争」「爆弾」「破壊」など、戦争や原爆被害の悲惨さを表す語が多く使用され、やや年数の経過したBグループでは、戦争や原爆被害の悲惨さから少し離れて、「地球」「人類」「世界」「心」「訴える」など、世界を視野に入れた語が用いられるようになり、最も新しいCグループでは「会議」「未来」「世紀」「思い」「声」など、未来志向の語が用い

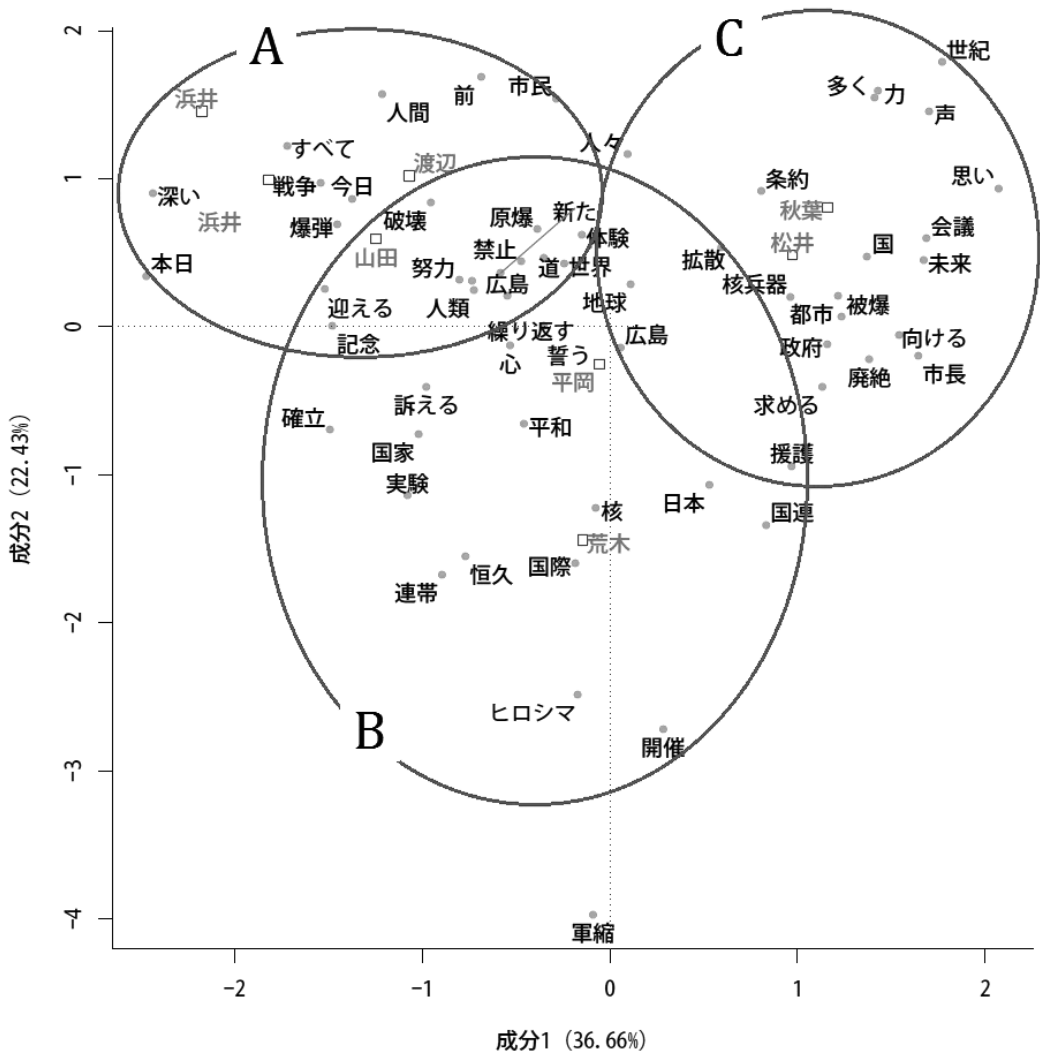


図2 対応分析

られるようになった、と総括される。

## 5. おわりに

以上、言語学の様々な手法を用いて、平和宣言に用いられてきた語について分析を行ってきた。それぞれの手法から導き出される結論は、互いに矛盾するところはないけれども、1つの学術論文としてはやや散漫な記述になっていることを自覚している。

筆者たちは政治学や平和学を専門的に学んだわけではない。今回は、あくまで、平和宣言をテキスト・資料として、言語学的な分析を行ったものである。そのような分析が平和宣言というテキストの性質上、馴染まないものであることも、承知している。しかし、被爆70年を過ぎたこの地点において、どのような手法にせよ、平和宣言について考察し、公表することに一定の意味はあると考え、本論文

を公刊する。大方の批正を請いたい。

なお、本論文は、本論文の筆者の一人である藤井緑が、2016（平成28）年1月に県立広島大学に提出した卒業論文「広島市長による平和宣言の言語学的研究」に基くものである。

## 参考文献

- 秋葉忠利（1986）『真珠と桜：「ヒロシマ」から見たアメリカの心』朝日新聞社  
秋葉忠利（2004）『報復ではなく和解を：いま、ヒロシマから世界へ』岩波書店  
荒木武（1986）『ヒロシマを世界へ』ぎょうせい  
宇吹暁（1992）『平和式典の歩み』（平和冊子 No.8）、広島平和文化センター  
奥田博子（2010）『原爆の記憶：ヒロシマ/ナガサキの思想』慶應義塾大学出版会  
角家文雄（1996）「ヒロシマ「平和宣言」の50年」『鶴見大学紀要 第4部 人文・社会・自然科学篇』33, pp.105-145  
新宅匠（2012）「「平和」の語りの変遷—広島平和宣言を中心に—」広島大学総合科学研究科「広島市民の平和意識調査」調査チーム編『「広島市民の平和意識調査」結果報告書』、pp.1-15  
陣内正敬（2008）「言語行動としての高校野球・選手宣誓：スポーツ言語文化論の事例研究」、『語学教育フォーラム』16, pp.339-356  
陣内正敬（2011）「高校野球・選手宣誓の時代性」、『九州大学言語学論集』32, pp.267-280  
樋口耕一（2014）『社会調査のための計量テキスト分析：内容分析の継承と発展を目指して』ナカニシヤ出版  
平岡敬（1996）『希望のヒロシマ：市長はうったえる』（岩波新書）、岩波書店  
平岡敬（2011）『時代と記憶：メディア・朝鮮・ヒロシマ』影書房  
松浦陽子・佐藤健一・川野徳幸（2013）「広島市の平和観：平和宣言を通して」『広島平和科学』35, pp.67-101  
松浦陽子・佐藤健一・川野徳幸（2014）「長崎の平和観：長崎平和宣言頻出単語の解析を通して」『広島平和科学』36, pp.75-100  
山本朗（1982）『広島県大百科事典 下巻 そ〜わ』、中国新聞社  
『中国新聞』1955年5月2日朝刊より「地方政治の新分野決る」（1面）、「渡辺新市長 第一声を放つ」（8面）、「渡辺新市長の横顔」（8面）

## 参考ウェブページ

※以下のウェブページの最終アクセス日は、すべて2016（平成28）年10月31日である。

「過去の平和宣言（日本語）」（広島市公式ホームページ内）

<http://www.city.hiroshima.lg.jp/www/genre/1001000002122/index.html>

「市長のプロフィール」（広島市公式ホームページ内）

<http://www.city.hiroshima.lg.jp/www/contents/1302241757846/index.html>

「特集 ヒロシマ 市長・知事に聞く」（ひろしま国ホームページ内）

[http://www.hiroshimapeacemedia.jp/hiroshima-koku/special/index\\_20110712.html](http://www.hiroshimapeacemedia.jp/hiroshima-koku/special/index_20110712.html)

「広島・長崎が消えた」（NHK平和アーカイブスのページ内）

[http://www.nhk.or.jp/peace/chrono/chrono\\_02.html](http://www.nhk.or.jp/peace/chrono/chrono_02.html)

「平成26年の平和宣言の作成に際し寄せられた「被爆体験談や平和への思い」集」

<http://www.city.hiroshima.lg.jp/www/contents/1421388203182/index.html>

「平和宣言に関する懇談会 出席者名簿」(広島市公式ホームページ内)

<http://www.city.hiroshima.lg.jp/www/contents/1432903161923/index.html>

Abstract

**A Linguistic Study of Changes in “PEACE DECLARATION”  
by Mayors of Hiroshima City**

—Focus on words and number of characters —

Shunsuke OGAWA & Midori FUJII

This paper analyzes linguistically the “Peace declaration” of Hiroshima city. There are 68 declarations discussed in this paper. The first declaration was published in 1947, and the latest one was declared in 2015. The conclusions are as follows:

1) The number of characters is gradually increasing. The shortest peace declaration, held in 1952, includes only 304 characters. The 2015 peace declaration is the longest declaration made and contains 1973 characters.

2) The words and vocabulary of the "PEACE DECLARATION" have been influenced by social backgrounds, the thoughts and creeds of the mayor who reads them during the Peace memorial ceremony on August 6, every year.